



コルネリオ会

(防衛関係キリスト者の会)

ニュースレター No. 168

2025年4月



愛とロマンの地へ（奥地宣教と日本）その3

アルゼンチン宣教師 在原 繁

(前号からの続き)

(4) 民族意識

ミシオネス州への入植を果たした民族は七十諸国（アルゼンチン全体では百二十ヶ国）と言われる。中でもドイツは最大の勢力を誇り、州のリーダー的地位を今も堅持している。そこで、ここからはドイツ系に的を絞って話を進めることにする。

コロニアに住む各国移民者たちの民族意識は高く、自国の文化と習慣で移住地全体をがっちり固めているため、そこは依然として「閉鎖的なムラ社会」となっている。

すでに述べた「日系社会」と同様、ドイツ民族の移住地も、そこは異常ともいえるほど強力な「集団的連帯社会」である。コロニアには独自の決まりや掟があり、これに反したものは排撃されるか、一切の取引としての人間関係を断ち切られることを覚悟しなければならないだろう。時代とはいえ、近年増加傾向にある「不倫」など容認されることは、ほぼありえない。

かつて、知人のドイツ人 K 氏が妻子を捨て愛人のもとに走ったところ、K 氏はドイツ社会との交流を断ち切られてしまっていた。追われるように去って行った、と言うのが正解だろう。コロニアを追放された K 氏と女性との間に生まれた子供たちは、悩みの中で私たちの教会へ導かれたものの、K 氏夫妻とその子供たちが、将来いつの日かドイツ人社会に復帰する可能性は、ほぼゼロだろう。「鉄の団結」というドイツ人社会の連帯感は、日系社会と「がっぷり四つ相撲」か、それ以上に堅固な「人間関係ムラ社会」なのである。

「集団的連帯感」と、何よりも民族としての

「アイデンティティー」を意識しないアルゼンチン人社会と、これでは融合できるものではない。それゆえ、一般アルゼンチン人との交流には一線が引かれていると言っても過言ではない。一線というより「城壁」と言ったほうが正解かも知れない。移住者とその子孫の心に現在も流れ続ける「民族意識」「開拓精神」「自給自足経済」の観念が、一般のアルゼンチン人が及びもつかないレベルにあることが要因であろう。

移住者の「集団的連帯感」は、何といたってもその歴史からくる。ドイツ移住史から見てみよう。

彼らは、ナチス台頭前の想像を絶するハイパー・インフレによる経済恐慌、第二次世界大戦中の戦災と殺戮、戦後の飢餓と荒廃を逃れてきた民族である。その後、南米への移住を果たしたものの、ブラジルやパラグアイでの内乱に巻き込まれ、そこでも迫害や離散の谷を通過して来ているのだ。精神的「絆」は異常とも思えるほど強い。

アリア人としての民族的優越意識も強いのだろう。他民族に対する警戒心や防衛本能は必然的に高まり、同じ文化と習慣を有しない多民族に一線を引く「非妥協的社会」を形成するに至ったのは、当然といえるだろう。

ナチスドイツの戦争犯罪容疑者の多くが、アルゼンチンに逃れ来ていることは世界に知れた話である。ユダヤ人殺害の最高責任者であったアドルフ・アイヒマンが潜伏先の首都・ブエノスアイレスで逮捕され、モサドによってイスラエルへ連れ去られ、裁判の後、処刑された事件は映画にもなって有名である。これは世界を震撼させた事件であった。知人の話によれば、ここミシオネス州と

パラグアイ国境地帯にも、アイヒマンは短い期間だが潜伏していたと言われる。ドイツ系だけがっちり固められた単一民族社会に他民族が食い込むスキはない。ここは戦犯容疑者の絶好の隠れ蓑になっていたのだろう。

基本的に、「個人主義」という相互不干渉の人間関係の世界に生きているのがドイツ人や西洋人であることを認識する必要がある。

日本では京都に「あがっていかはる？」と自家に手招きする文化があるらしい。大阪では「よう、兄さん！ 上がってメシ食ってけ！」というところか。人種のるつぼ南米で「あがっていかはる？」なんて言う習慣はない。「あがっていかはる？」なんて手招きすれば、「ヤッパ〜！」であがり込まれ、腹いっぱいか二食分はかきこみ、ついでに室内を物色され、後の日に盗難される事すらありえるのだ。火事と葬式付き合い程度の人物に「揉み手腰折り」の微笑みで応えたり、家の中へسنナリ招き入れる文化や習慣など、まずあり得ない。

(5) 日系コロニアというムラ社会

ミシオネス州内の「日系人社会」に目を転じる。圧倒的多数の日系人は「日系コロニア」というムラ社会の日本人会に属し、「相互扶助体制」に身を寄せている。たとえ都市部へ移り住んでも、複数の日本人がいれば、そこに日本人会はある。日本人は「日本人会」を軸にした生活文化圏に身を寄せ、その一構成員となって生きる。これは、文化の生み出す「空気」が原因だろう。日本文化の「空気圏」に身を置いた途端、日本人は安堵するのだ。

日本人会では相互扶助を基本とした責任体制が敷かれているため、一般アルゼンチン人が入る余地はない。「会費徴収」「各種勤労奉仕」「向こう三軒隣り」「お互い様」「持ちつ持たれつ」「もらったからお返しする」という「人間関係ムラ社会」の生活慣習を、現地アルゼンチン人は本質的に理解も実践もできないからである。

これは決して善悪の問題ではない。「文化」問題として理解したら正解だろう。「隣で葬式があっても知らんぷり」レベルのアルゼンチン人では、

日本人会の屋根の下で生きること自体が無理なのである。

私たち夫婦にドイツ人の友人は多い。「日本人」と言うだけで「どうぞ！」と家の中へ招かれた経験は幾度もあった。これは、日本人とドイツ人の文化や人間としての気質や思考形態が共に似ている点が大ききように思う。例えば、集団連帯性による「鉄の団結」「約束を守る」「維持、管理、運営能力」、そして「生真面目」（四角い思考形態）辺りだろうか。ドイツ人も日本人に対し同じ思いを抱いているらしい。

特に、ドイツ人有識層が「近現代史」を通し、近代化された現在の日本と、戦後の経済的発展の「歴史的要因」を知っていることは大きいと思う。第二次世界大戦時の同盟関係により、日本とドイツの絆はより堅固になったと一部日本人は思うかもしれない。しかし、彼らドイツ人の日本人に対する親近感、大戦中の日独同盟も若干あるにせよ、文化、習慣の中に見られる人格的類似性から来るものだろう。文化の類似した民族との付き合いに、人は親近感を覚え心開くものなのだ。

(次回に続く)

献金感謝 (2024. 12. 1-2025. 2. 28)

皆様の献金を心から感謝します。(敬称略、順不同)

宮岡修二、矢田部和子、長橋和彦、
ストライプジャパン、大頭眞一焚き火塾、
今市宗雄、石川信隆、圓林栄喜・さゆり、
小島健二、瀬在道晴・米子、藤原幸生、
海野幹郎、森 祐理、
基督兄弟団水戸教会 (大島之成・志村誠信)、
石井克直、吉田靖、尾崎伸作、廣田具之、
中野久永

献金振込先は次のいずれでも結構です。

- ① 郵便振替口座：00130-3-87577 (コルネリオ会)
- ② 銀行振込口座：三菱UFJ銀行 和光支店
店番 505 口座番号 0385701
ジェーエムシーエフ ナガハマタカユキ
- ③ ゆうちょ銀行 ○一九(ゼロイチキュウ)店
当座 0087577 コルネリオ会

Interaction2025 のご案内

2025 年 10 月に、日本で東アジア・中央アジア地域の軍人クリスチャン団体 (Military Christian Fellowship) の集会を開催します。

参加を希望される方は、中野会長までご連絡ください。若い兄弟姉妹の参加をお待ちいたしております。

1. 目的

東・中央アジア地区の MCF リーダー間の主にある交わりを深める。

AMCF および国内の宣教組織や機能を理解しながら、リーダーとしての識能を高める。

2. テーマ

「主は私の羊飼い、乏しいことはありません」

詩篇 23 : 1

3. 日時

2025 年 10 月 17 日 (金)～19 日 (日)

4. 場所

牛込キリスト教会

〒162-0052 新宿区戸山 1-7-11

TEL : 03-3203-5489

5. 宿泊

戸山サンライズ

〒162-0052 新宿区戸山 1-22-1

TEL : 03-3204-3611

6. 参加者

約 30 名 内訳：韓国 3～5 名、台湾 2～3 名、モンゴル 2～3 名、中央アジア 2～3 名、日本 5 名 (スタッフ除)、アメリカ 3 名

7. 主催

コルネリオ会 (防衛関係キリスト者会)

8. 問い合わせ・申込先

JMCF 会長：中野サム jmcfusa@gmail.com

電話：070-4091-4875

9. 申し込み締め切り：2025 年 7 月 31 日

	1 日目 10月17日 (金)	2 日目 10月18日 (土)	3 日目 10月19日 (日)
0610		早天祈祷会	早天祈祷会
0710		朝食	朝食
0900		セッション2 「リーダーシップと倫理」	セッション3 「軍人クリスチャンの成長」
		各国報告	各国報告 Gp交流会 3 (帰納的聖書研究・会話的祈祷訓練 3)
			主日礼拝 (閉会礼拝)
1200		昼食	解 散
1300		東京都内ツアー ツアー1：皇居・秋葉原等 ツアー2：都庁・大久保等	
1330	受付 戸山サンライズ		
1600	開会礼拝 記念撮影	夕食会	
1740	歓迎夕食会		
1900	セッション1 「帰納的聖書研究・会話的祈祷」	証し会	
	Gp交流会 1 (帰納的聖書研究・会話的祈祷訓練 1)	Gp交流会 2 (帰納的聖書研究・会話的祈祷訓練 2)	

宮田^{てるあき}皓旦兄を偲ぶ

コルネリオ会会員 中岡一秀

宮田皓旦兄は昨年の11月10日（日）に礼拝を終え帰宅された後、主のみ許に召されました。享年92歳でした。訃報を受けた会計担当の長濱兄は中野会長に次のように書き送られました。「宮田兄は横浜でのアジア大会では、大会準備に向けての祈り、献金を含め大変貢献くださいました。大会当日においても、中華街での夕食ののち、指路教会までの長距離の行程を、参加者を案内してくださった、と記憶しています。」

横浜指路教会で行われた葬式では、コルネリオ会を覚え、宮田兄の働きと東アジア大会のためにこの教会が用いられたことへの感謝が述べられました。石川前会長と中野会長が参列されました。

宮田兄はかねてより海野幹郎・涼子ご夫妻と親交があり、筆者共々お宅を訪問したり、黒田^{これのぶ}惟信牧師とエステラ・フィンチの墓参りに参加した思い出があります。そのような縁もあり、馬堀^{まぼり}聖書教会で幹郎兄の受洗を祝い、その証を聞かせていただく予定があることをお知らせした際には直ぐに参加を希望されました。これが宮田兄とコルネリオ会の方々との最初の出会いだったように記憶しています。以降、会の活動に理解を示され、幹郎兄共々横浜オンヌリ教会での東アジア大会の準備会などで同席できることを喜んでおられました。例会にzoomを利用することが決まった際に、お互いに情報交換し、二人で試行し、初回に備えたのも懐かしい思い出です。当初は毎回参加されていましたが、次第にその回数も減り、参加は途絶えました。外では味わえないコルネリオ会ならではの例会だと高く評価しておられただけにご本人も心残りだったに違いありません。

横浜指路教会において宮田兄はその信仰と生き様を通して多くの教友の信頼と尊敬を集めておられました。

普段は口数少ない方ながら、集会の席上で求められると手短に本質を捉えた発言をされ、同席の

者が共感を覚えたり、反省を促されたり、新しい試みを動機づけられたりもしました。ここ20年余り続いている週日の会堂開放も宮田兄の提案に基づくもので、「会堂開放しています。ご自由にお入りください」と書かれた看板を見て立ち寄り、教会の歴史と信仰を知った人々の中から、礼拝に出席し、受洗に至った人も少なからずおられます。地域社会でも日雇い労働者の居住する寿地区での炊き出しや、夜回り、そして全国的な退職者の互助会などで長年奉仕を続けて来られ、生涯に亘って思いと言葉と行いでキリストの香を放ち続けておられた方でした。

月例会動画の案内

コルネリオ会月例会における牧師先生らのメッセージをコルネリオ会のYouTube ページにアップしております。見逃された方、興味のある方は是非、次の内容で検索してご覧ください。

コルネリオ会 防衛関係キリスト者の会

転居に伴う献金者への領収書送付の遅延の可能性について

2025年3月中旬～4月上旬の会計担当転居による郵貯口座の住所変更手続き中につき、受入れ通知票の新住所への転送が遅れます。領収書送付の遅延の可能性がございます。献金を考えておられる方は、転居後、4月上旬を目途に、住所変更の手続き終了後に再度ホームページにてご連絡しますので、少々お待ちください。

2025年3月

コルネリオ会会計 長濱貴志

(編集子)

ご献金用の振替用紙のない方は下記アドレスにメールいただければお送りいたします。お気軽にお申し付けください。hsenrin@gmail.com です。